

## 付編 飯山地方の縄文時代の落とし穴について

今回の調査において、縄文時代の落とし穴と推定される遺構が多く発見された。飯山市域におけるこれまでの発掘調査によって、多くの遺跡から縄文時代の狩猟に伴う落とし穴と推定される遺構が数多く発見されている。一般的には落とし穴を含めて土坑と総称され、その用途には貯蔵穴・墓坑・落とし穴などいろいろなものが含まれている。針湖池遺跡出土土坑は明確に落とし穴と証拠づけることはできないが、配列や周辺遺跡の状況から落とし穴として推定し、溝状の土坑をTP、長方形もしくは楕円形の土坑をSKと略称した。通例では総称として土坑(SK)、落とし穴(重力ワナ)＝トラップピット＝TPとしており、その意味では本遺跡出土の落とし穴をすべてSKあるいはTPに統一して報告すべきであるが、形態としてまったく異質であることから、便宜的に分けて呼称することとした。

近年、飯山市域における発掘調査において、落とし穴と推定される遺構が数多く検出されるようになった。これらは必ずしも十分な時間をかけて調査したわけではなく、遺構の構造についてのデータは少なく、落とし穴と証拠づける根拠も明確でない。しかしながら、数次に亘る調査によって面的にとらえられる事ができ、かなり大規模に構築され、それが地形的にも構造的にも落とし穴と首肯できる成果が得られるようになってきた。本稿は、落とし穴と推定される飯山市域内の土坑の集成を行い今後の資料収集の一助になればと思い取りまとめるものである。

市内において、縄文時代の狩猟に伴う落とし穴と考えられる遺構が検出された遺跡は、針湖池遺跡を含め14遺跡を数える。以下に表で掲載する(SK方形土坑・TP溝状土坑)。

遺 跡 名	SK出土数	TP出土数	推定時期	地 形 ・ そ の 他
新 堤	0	1	縄文早期	高原 池を望む斜面
トトノ池南	5	2	縄文早期	丘陵地
鳴 沢 頭 I	0	22	縄文早期	沢(低湿地)を望む丘陵地
休 場	0	2	縄文早期	沢(低湿地)を望む丘陵地
下 境 大 原	0	22	縄文早期	沢(低湿地)を望む丘陵地
南 原	3	2	縄文時代	千曲川を望む段丘斜面
屋 株	0	8	縄文前期	千曲川を望む段丘斜面
照 丘	1	12	縄文時代	長峰丘陵の沢を望む斜面
上 野	3	49	縄文時代	千曲川河岸の底丘陵上全面
小 泉	4	144	縄文時代	長峰丘陵に接した舌状大地 低湿地に接続
柳 町	2	7	縄文時代	外様平に接する長峰丘陵上
針 湖 池	11	38	縄文後期	本報告
有 尾	11	16	縄文前期	長峰丘陵南端の千曲川河岸段丘
須 多 ケ 峯	11	0	縄文中期	外様平を望む台地上
計14遺跡	51	325		

表5 飯山地方の落とし穴と推定される遺構出土遺跡一覧

鳴沢頭I遺跡(図23)は、通称岡山上段地域で、高原状の台地であるが小さな低湿地や台地など複雑な地形となっており、周辺の新堤・トトノ池南・休場・下境大原遺跡などとも似た環境である。本遺跡は通称「鳴沢」の低湿地を望む斜面に遺構が構築されるが、焼土やロームマウンド、落とし穴と考えられる土坑のみで住居などは確認されなかった。遺物は、押型文土器・沈線文などの早期土器および前期諸磯～前期終末期の土器が発見されている。

落とし穴は長方形の土坑で、坑底に一方所の小穴が認められるものである。斜面上部から低湿地に向かって規則正しく並ぶものもある。トトノ池南遺跡では長方形土坑が等間隔に並んでおり、周囲より押型文土器が検出されている。

南原・屋株・上野遺跡は、千曲川河岸の段丘・丘陵地に立地している。このうち、南原・屋株は千曲川東岸にあって、両遺跡の間には境沢と呼ばれる谷状地によって分けられる。発見された落とし穴は、長方

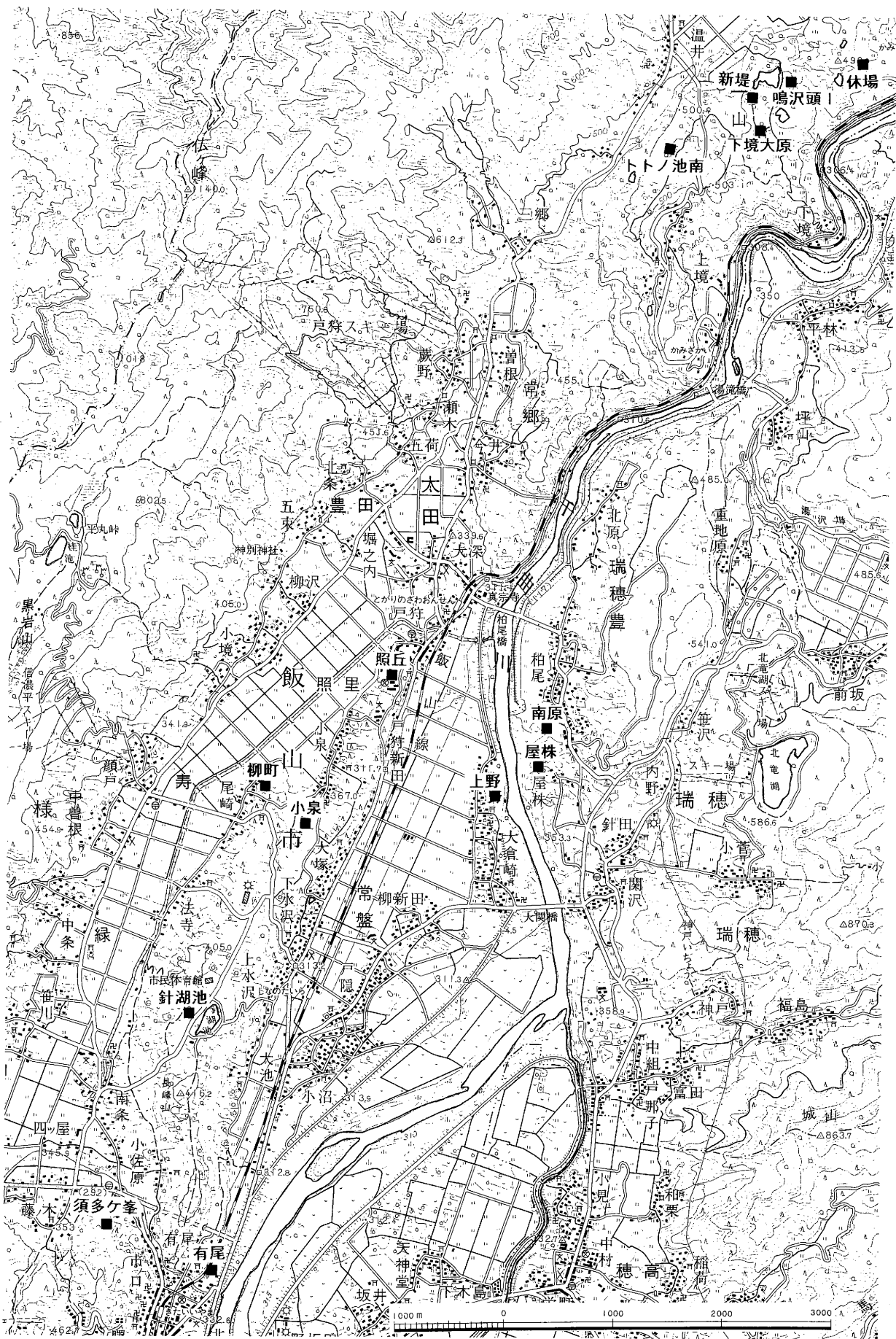


図23 飯山地方縄文時代落とし穴出土遺跡 (1 : 50,000)



図24 鳴沢頭Ⅰ遺跡落とし穴配置図(1:1,000)

形の土坑のほか溝状の土坑も出土している。また、上野遺跡は過去10回にも及ぶ調査によって、溝状土坑が上野丘陵全体に列をなして構築されていることが分かってきた。このほか、須多ヶ峯遺跡では方形土坑が等間隔に列をなして検出されている。

小泉遺跡は弥生時代の遺跡として知られているが、小丘陵全体に縄文時代の溝状土坑が発見されている(図25)。丘陵地より低湿地に列をなして続いていくことが明確に確認されている。

このように、方形土坑でも溝状の土坑でもいくつかまとまり、列をなして構築されていることが分かってきている。そして、それらは台地の上から低湿地へ線として続くようなあり方だと考えられる。この点については、溝状土坑の方がより明確に現れている。



図25 小泉遺跡落とし穴配置図(1:1,000)